90-08-17331

Keio University

CALAMVS GLADIO FORTIOR 1858

慶應義塾大学ビジネス・スクール

青年土建　株式会社

2008年春のある夜、青年土建㈱の社長・青年建次郎はＦ県M市にある行きつけのスナック「パピヨン」のカウンターにいた。2時間ほど前から、M市内の老舗建設会社・M建設㈱の社長・加田和久と一緒にこの店で飲んでいた。二人はM高校時代の同級生だ。

建次郎は『白羽の矢』という言葉を思い出していた。最近では「白羽の矢が立つ」というと「重要な任務に抜擢される」というプラスイメージの意味で使われることが多いが、元々は「犠牲者として選び出される」ことを指すマイナスイメージの言葉だ。「神が屋根に白羽の矢を立てると、その家に住む少女が生け贄として差し出された」という言い伝えによるらしい。

この時代に土建屋の三代目社長になった自分は、まさに元々の意味での「白羽の矢が立てられた」ようなものだと思いながら、建次郎は手元のグラスを見つめていた。グラスには氷が溶けて薄くなった焼酎の水割りが入っている。隣の席では酔いつぶれた加田がカウンターに顔を埋めるように眠っている。

会社設立の経緯と代表者の経歴

青年土建㈱は、公共土木工事を主とする建設会社で、本社はＦ県Ｒ市Ｔ町にある。同社の起源は、戦後間もない頃の焼け跡と化したＴ町で、インドシナ戦線から復員した祖父・青年土之助が闇ルートから手に入れたトラックで始めた運送屋に遡る。その後1954年に、土之助の個人企業でＦ県に建設業登録して正式に建設業を営み始め、1967年に資本金1,000万円で「青年土建株式会社」を設立した。以後2度の無償増資を経て、現在の資本金は5,000万円となっている。

1977年、土之助の長男であり、建次郎の父である青年建之助が代表取締役に就任し、事業を承継した。一線を退いて代表権のない取締役会長となった土之助は、9年後に75歳で他界した。

本ケースは、建設業経営者　長谷川　信が、中部大学の小野桂之介教授の指導を得て、クラス討議の基礎資料として作成したものであり、経営管理の適切または不適切な処理を例示しようとするものではない。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒223-8526　神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1番1号、電話045-564-2444、e-mail: case@kbs.keio.ac.jp）。また、注文はhttp://www.kbs.keio.ac.jp/へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。

Copyright© 長谷川 信（2008年10月作成）